

## 追想の記

塚田 善四郎（大正8年生まれ）

入隊より支那大陸まで

昭和十五年に徴兵検査に合格した私は12月1日、東部六十七部隊（高田歩兵30連隊）に入隊する。その時の連隊長はアッツ島で玉砕された山崎大佐であり中隊長は阿部中尉であった。内地での教育第1期検閲も終わり16年3月15日桜の花も見事もなく中支那の戦場にある13師団歩兵第58連補充要員として出発したのである。

阿部中隊長や教育係班長に送られ高田の駅に着いたのは夜中であった。すでに列車はホームにあり、直ちに車上の人となる。それを知ってか駅には僅かではあったが身内、肉親が見送りに見えている。我が家では誰かがいるかと思い列車の窓から見ると、父と姉夫婦が家の紋章のついた高張提灯を高くかざしておるのが目に入る。私が顔を出すと人目をばかのように近寄って来てくれた。その時何を話したかは今の私には記憶がない。

翌朝、宇治に到着。その日に出帆する。船は数日にして着いたのが上海港であった。

揚子江を遡るにつれて河の大きく広いのにビックリする。これが支那大陸だ、船が進むにつれても両岸が見えないのだ。しばらくするうちにだんだんと両岸が見え始めた。両岸には柳の木、広い平野に繁る麦畑、同時に我々は戦場に近づきつつあるのだと思うと心の中ではいっそう緊張するし、また不安と死にかくせない気持ちがあったのも本音である。船はなんらの抵抗も無く武漢港に着く。武漢は完全に日本軍の占領支配下にあった。その後は自動車にゆられ我々の目的地宜昌に到着、そこで私は1中隊補充要員となり宜昌対岸の連隊本部に入る。申告の後、中隊の警備地である左一線の中島高地に着く。敵との距離は約300メートル位であった。中隊長は土田中尉であった。この中島高地とはこの戦闘で勇猛果敢に奮戦、戦死された中島少尉の名前をつけた陣地である。

中支那よりビルマ戦線へ

中支那を転戦していた58連隊、烈兵団に編成される。昭和18年1月8日、列兵団南方に転戦。私のような下士官には行先が分からないが1月なのに上海で夏服の配給があったから予想はついた。1月27日、呉松港出帆、最初に寄港したのが台湾の基隆港であった。その後船団は海軍に守られ東シナ海、南シナ海を南に進む。幸いにして航海中は敵機に攻撃される事もなく、2月10日に名も知らぬ大きな港に着く。それが昭南港（現シンガポール）であった。下船と同時にジョホールを渡り、マライ国タイピンに着いたのが2月12日である。タイピンでの3か月間は来るべきビルマ戦線の為に中隊長を先頭に演習、演習の連続である。ジャングル突破作戦、あるいは敵の重火器や戦車に対する攻撃法、それは実戦以上であった。しかしここは南の国、珍しい果物を初めて食べ、英国人の生活方式を知ったのもここである。いよいよ3月29日タイピンを出発、そして6月下旬からあの有名にして沢山の戦犯を出したタイ国とビルマ国の国境を通過したのである。

タイとビルマはちょうど雨期の最中である。来る日も来る日も雨また雨、体は毎日の雨でずぶぬれ、靴の中は靴下もちぎれ、地下足袋<sup>じかたび</sup>の兵隊もいる。夜になれば宿舎とは名ばかりのところこに小銃をしっかりと握り天幕<sup>てんまく</sup>を一枚かぶり寝る。朝になればそのまま泥道の中を行軍した事を思い起こすとき、今の私のあるのが不思議なくらいである。

10 数日にして国境を通過してビルマ国のペゲーに着く。それより 58 連隊のビルマにおける戦闘が始まったのである。

### コヒマの火蓋<sup>ひぶた</sup>切られる

58 連隊はコヒマ占領の命下る。コヒマとはインドアッサム州インパールに通ずる最も重要な町である。出発を前に携帯品は米 3 日分、調味料(塩)、小銃弾<sup>しょうじゅう</sup> 120 発、手榴弾<sup>しゅりゅう</sup> 2 発等完全武装、一寸<sup>ちよつと</sup>転ぶと一人で起きる事の出来ぬ程の重量を各々の兵隊が背負ったのである。9 月、夜にチンドウイン河の渡河<sup>とが</sup>開始、我々は暗に乗じて工兵隊のあやつる鉄舟に乗り込み渡河をした。対岸の浅瀬が近づくと各々鉄舟より河にとび込み、あらかじめ命令された地点に集結する。敵に発見されず射撃もなく敵機の飛来もなく無血敵前渡河を出来た事は天佑<sup>てんゆう</sup>であった。

さていよいよこれより終戦までのビルマに於ける吾<sup>わ</sup>が中隊の激戦が始まったのである。(戦闘状況は 58 連隊戦友会の 58 連隊史にあり、高田図書館) 後世<sup>こうせい</sup>迄も語り草になるであろうコヒマ、インパール戦が始まったのである。昭和 20 年 8 月 15 日終戦の日迄約 1 か月、来る日も来る日も激戦であった。最後は我が軍、砲の名のつくものも無く、またあっても砲弾無く、友軍機の 1 機も飛来無く、昼はジャングルにひそみ、夜襲<sup>やしゅう</sup>夜襲の戦闘であった。特に中隊の激戦地ソヒマコヒマの一本木高地、サンジャックでは沢山の上官戦友が戦死されたのである。今ここに追悼<sup>ついでう</sup>の記を投稿するに当たり、終戦より 63 年、祖国の為にビルマの地で命を捧げられた沢山の戦友の英霊<sup>えいれい</sup>のご冥福<sup>めいふく</sup>を心よりお祈り申し上げます。であります。